

# お題目総弘通運動の今日的意義 — 伝統と創造 —

長谷川 正 徳

(日蓮宗現代宗教研究所長)

いま、わが日蓮教団は、護法運動といい、宗徒総弘通と称し、そして現在はお題目総弘通運動なる呼びかけをもつて、いかにもして、伝統教団を真の伝道教団たらしめようと真摯な努力を継続している。

伝統教団の「伝統」とは何なのか。伝統の本質は「受けついでもの」であり、自分で勝手につくったものではない。伝統は過去から受けつがれ、やがて、未来に伝えられてゆく。

しかし、受けつぎ伝えられるといつても、単に生物の遺伝のように繰り返かえずのではなく、自覚をもって再創造するのである。

教団の伝統は、まず、教団のわれわれが、それに順うべきものとして、われわれの存在に先立つて教団の重厚な歴史的なものとして存在する。われわれ教団人が教団内に存在するためには、この教団伝統を「訓練的なもの」としてか、あるいは「束縛」として学びとらねばならない。

しかしそのとき、これを盲目的に学びとり、習慣的に追従するだけならば、伝統は硬化し、涸渇し、凋落する。伝統はこれを主体性において担いとり、支えもつときにのみ、真の伝統であることができる。

この意味で、伝統とは、単なる繰り返かえしではなく再創造であり、不断に再創造されることよつてのみ、自己自身を維持することのできるものである。このことは、伝統が単なる墨守や模倣に終るとき、亡びてしまうということでもある。

われわれの教団は、この伝統と創造を通じて自己同一性を保ちつつ、たえず新しい教団理想の実現にむかつて無限に進歩し、発展するものとならねばならぬのである。

かかる意味において、いま展開されつつあるお題目総弘通運動とは、教団の再創造運動であらねばならない。

ここで、特に教団内の若き青・壮年の諸師に訴えたい。

いわゆる実年とか老年とかになると、ややもすれば、伝統を墨守し、かえって教団の真の生命力を減殺してしまうおそれがある。それに反し、伝統の否定を通して教団生命の自己同一性を保持し、それを教団の真の理想にまで高めるのは、若い世代のもつエネルギーである。

若いエネルギーは、積極的に伝統を破壊し、伝統の否定をさらに否定の否定に転換し、それを創造的に肯定することによって、教団の自己同一性を保持し、宗祖大聖人の理想（広宣流布）具現に向つて教団を再創造・再編成してゆくものとなる。

かくして、教団の青・壮年の諸師こそ、真に将来の教団の担い手であり、その創造者であるということをここに強調して訴えたい。

今日の教団あげてのお題目総弘通運動が、以上の如き伝統と創造の論理を踏まえた生命ある実践運動として展開されようとしているところに、この運動の今日的、そして歴史的意義があるといえよう。